

# 見つけよう防災の種

最近「防災」を勘違いしている人が多い様に感じるのは、日本の防災の転換点ともいえる1961年「災害対策基本法」施行からではないかと考えられます。確かに素晴らしい法律！でもこの日を境に「依存防災」（何処の誰か知らない他人に命を丸投げした防災）がスタートしたことで、日本の防災はスタートラインを引き間違ってしまったと考えられます。「何を間違った」と反論も聞こえてきそうですが、結果として阪神・淡路大震災や東日本大震災では、何故あそこまで多くの人の命を巻き込み、根こそぎやられてしまったか？どこが・・・？何が・・・悪かったのか？



私たちは子どもの頃から「地震が来たら机の下に」と教えられてきました。しかし、それを活かしかねなかった結果が多くの人の命を消してしまったのです。

何故に活かされなかったか？ひょっとすると私たちは地震や災害の本当の力、恐ろしさを実際には判っていないのではないかと考えられます。

「50年や100年に一度の確率」と聞かされても、「ついこの間大地震が発生したから、しばらく発生しないよね」と勘違いをしています。確かに、揺れたその震源は50年や100年先かも知れないが、ほんの数キロ先では今か今かと力を蓄えていることを都合良く忘れ去っています。

相手は、大自然であり、人間が幾らあがいても正確な周期や事前予測なんてできません。日々の天気予報ですら、予測できないことも多く、傘を持たずに出て雨に濡れてしまうこともよくある笑い話です。



ところが近年、メディアでは偉い先生方が出演され、研究成果を持ってして自然をすべて理解したかの如く放送されます。すると視聴者側は、実際には不完全な情報でも正しいものと聞き間違えてしまいます。また番組制作側と言えば、日常的に災害や防災を考えている人達ではなく、番組制作というコンペに勝ち「はじめて防災やります」の人達が制作している場合が多いのです。それを、有名な司会が災害のすべてを伝えているかの勘違いを一般視聴者に起こさせてしまっていることも原因のひとつです。でも大抵の「防災番組」では「防災」と言いながら大半を災害発生「メカニズム」や災害原因の解説に時間を割き、命を守る「備え」である本来の防災情報は、一部分しかないのが現状であることから読み取れるはず。メディアだけではなく行政でもよくある話。市町村のホームページ「防災情報」のタグをクリックす



ると「現在、災害に関する情報はありません」と表示されることが多々見受けられます。これって防災情報ではなくて「災害情報だろう」って突っ込んでしまう。これは「防災情報」と「災害情報」の混同であり、行政ですら間違っただま50年余り経ってしまっています。やはり「伝えること」も整理をしなければ、今後も一般市民の防災意識は「依存防災」となり「命を守る防災」ができないままに次の災害を経験することになります。

それとは別に、情報通信機器では伝えることのできないもの、それは災害現場にしか存在しないもののひとつ「におい」です。この「におい」が伝わらないから、今のネットで残忍な現場写真を平気で目の当たりにしてしまうのです。しかし、経験したことのある臭いは、巧みな言葉の解説から感覚として自分の記憶から呼び出すことで「こうではないか」と危険察知をすることができます。臭いの記憶にないから「恐ろしい事」と感覚として捉えることができないのです。



「におい」から「災害後の大変さを知らせる」描写できたものが「人と防災未来センター（神戸）」内にある大震災ホールのドキュメンタリ

一映像「このまちと生きる」この中にあります。

ある少女を通じて、被災者の視点による被災直後から復興状況に至る経過を紹介する映像です。その中でインパクトのある表現が数カ所存在します。そのひとつに、避難場所の体育館で「におい」を表現した言葉が出てきます。多くの人が体験したことのある「イヤな臭い」だから直ちに頭の中で理解し、避難所の大変さを噛みしめることができるのです。この臭いは、ほとんどの人が学生時代の体育館での生徒集会、夏のムシムシした教室、体育授業のマットの臭い等と呼ばれ起こすのです。これは覚えようとして記憶に残したわけではなく、自然と身についたものなのです。



人は記憶しようと努力しても長期的に記憶できないものです。典型的なのは、中学校3年生でほとんどの人が覚えたとはいえずの二次方程式を覚えている人が少ない。しかし、小学校で覚えた九九は大抵の人は覚えている。これは日々の生活の中で必要としているかどうかではないでしょうか。

「だんご」はぜんぶで

3×3=9

そう考えると「防災」という「備え」を身につけるためには、日常の中で自然と記憶できるようにしておくこと。これが重要です。話を戻すと子どもの頃に覚えた「地震が来たら机の下に」は、なぜそうしなければならないかの意味をもう一度考える時が来ています。

命を守る行動は、日々の生活の中に組み込むことで「依存防災」からの脱却をしましょう。